

【題名】一九五〇年代の安部公房における共同体の問題—民族・階級・言語—

【氏名】坂堅太

【論文要旨】

本論文は、文学者・安部公房（一九二四 - 一九九三）が一九五〇年代にたどった文学的・政治的変容を、ナショナリズム・コミュニズムなどの「共同体」を巡る思想や幼少期安部の植民地体験、そして同時代の政治状況との関連から分析したものである。一九五一年に日本共産党へと入党した安部は、党の掲げた反米的民族主義にいかなる動機を持ってコミットしたのか、その経験はどのような形で安部の文学に影響を与えたのか、そして党との蜜月は何故破局へと向かっていったのか、という問題を考察する。

一般的に安部はナショナリズムを徹底的に批判した「無国籍作家」、「国際的作家」と形容されることの多い文学者である。しかし、安部のナショナリズム批判も、またそれを作家の本質であるとみなす評価言説も、ともに一九六〇年代以降に生み出されたものであり、それ以前、つまり一九五〇年代の共産黨員時代は視野の外に置かれていた。安部の死後、未発表作品や書簡を含む全集の刊行が開始されたことにより、五〇年代の活動についての研究状況も整備され、近年では多くの研究成果が生み出されている。しかしそうした研究では、一九五〇年代固有の可能性にのみ焦点が当てられ、その経験が六〇年代以降の安部の文学に如何なる影響を与えたのかという視点はない。そのため、一九五〇年代のナショナリスト／六〇年代以降の反ナショナリスト、という作家イメージの分裂が進んでしまっている。

そうした研究状況を踏まえ、本論文では安部のナショナリズム認識に焦点を当て、その変容の過程を分析する。六〇年代以降に展開される安部のナショナリズム批判の起点を五〇年代の活動に見出すことで、従来の作家イメージの分裂を止揚し、安部の文学を相対的に把握することが目的である。

第一章「言語への不信—〈真善美社版〉『終りし道の標べに』における「ノート」という形式について—」では、安部の処女作である小説『終りし道の標べに』（一九四八年）を分析対象とし、安部の文学的出発がいかなるものであったかを確認する。後年、安部が「実存主義を観念から体験のレベルに投影したらどうなるかという一つの実験だった」と回想していることを踏まえ、その「実験」の内実とは如何なるものであったかが作品の構造的な分析から明らかにしている。注目すべきは、はこの作品が一般的な近代小説のスタイルではなく、メタ的な視点を取り入れるために「ノート」という形式が取り入れられている点である。先行する「ノート」への批判により各章が書き継がれていくという連関関係や、作中人物による「ノート」解釈とそれへの反論の挿入、さらには語り手＝書き手として全体を統御するはずである「私」の崩壊など、様々な小説装置が用いられることにより、作

品は一義的な解釈を拒絶する「象徴的言語」となっている。そしてその形式的特徴が、言語による代理＝表象を拒絶したいという「私」の思弁的告白とも緊密な繋がりを持っており、同時代的には失敗とみなされていた安部の「実験」が実際には一定程度の成功をおさめていたことが明らかになる

第二章「レジスタンス主体としての「国民」概念—安部公房の国民文学論、その可能性と限界—」では、一九五〇年代の戦後国民文学論争において安部が展開した言説が分析対象となっている。竹内好の問題提起に端を発した戦後国民文学論争は、文学者だけでなく歴史学者や社会学者、政治学者など様々な領域の人々を巻き込むものへと発展した。文壇文学／大衆文学という分裂した文学状況の根本にある「近代主義」を批判する竹内は、封建制から完全に解放された近代的国民主体の確立を訴え、その達成を文学的に示すものとして国民文学を位置づける。これに対し、当時日本共産党が掲げていた反米民族主義にコミットしていた『人民文学』派の文学者たちは、反米闘争に資するレジスタンス文学として国民文学を構想し、竹内のような近代的個人の確立を目指す議論を批判した。従来安部の議論は後者の政治的な国民文学論の一派とみなされ、文学史的には見る価値のないものとされてきた。しかし安部の議論は以下の二点において異なる論点を提示していた。(1) 安部は国民文学の確立を創作方法の問題と結び付けて考えていたが、それは当時にあつてはいずれの立場からも否定されていたものであった。(2) 安部は求められる「国民」の姿を反植民地闘争の抵抗主体としてのみ捉えており、そこには封建制との対決という視点が完全に抜け落ちていた。(1)の点は、国民文学の問題をより実践的な領域において捉えうるものであり、そこにはこれまで指摘されてこなかった「可能性」を見ることができる。一方(2)の点は、安部の議論に政治的な色合いを過剰に与えることとなり、(1)のような「可能性」から論者たちの眼をそらす「限界」として機能することとなった。そして安部の国民文学論が(2)のような「限界」を抱え込まざるをえなかった理由は安部の満洲体験と深く関係しており、一九五〇年代の安部が見せたナショナリズムへのコミットが、コロンの罪の意識と密接に結びついたものであったことが明らかになる。

第三章「主観的被害者か、客観的加害者か—「変形の記録」における死人形象と戦争責任論」では、『群像』一九五四年四月号に掲載された小説「変形の記録」が取り上げられている。戦死者を語り手として中国戦線を描くこの小説では、まず死人という語り手の形象が重要となる。当時安部が主張していた記録芸術論を補助線としながら、この形象が「実体を持たない記号」を示すものであることを明らかにすることで、戦争を巡る言説状況を寓意的に描いた小説としてこの作品は位置づけられる。語り手である「ぼく」は一兵卒の死者として、将校など軍の上流階級にある人々の加害性を告発し、自身の被害性を強調している。支配者／被支配者、という階級差に基づく加害／被害の関係を強調する「ぼく」の語りは、当時国内で支配的な戦争責任観であった指導者責任観を象徴するものとして造形されている。これは占領終結後のナショナリズムの高揚の中、戦争責任そのものを否定するような旧軍人たちによる主張に対する批判として機能した一方、戦争責任を国内的な

ものに限定することにより、対外的な侵略責任を後景に押しやってしまうものでもあった。その点で、この作品に他民族の死人が登場し、日本兵としての「ぼく」の加害性を問うていることは重要である。それまで階級差に基づく加害／被害の語りを展開してきた「ぼく」は、日本人／中国人という民族間の加害／被害関係を突きつけられることにより、自身を被害者として位置付けることが不可能になってしまう。ここには、国内的に閉じたものへと変質しつつあった戦争責任を巡る言説状況に対し、国外からの視線を突きつけることでその閉鎖性を問おうとする安部の批評性を見て取ることが可能である。このような国民全体の加害責任を問う認識は、ベトナム反戦運動が高揚した一九六〇年代以降に一般化していくものである。安部がこのような加害認識を時代に先んじて提示することが出来た理由は安部の植民地体験としており、支配民族としての加害性に意識的であったからこそ、戦争責任論の閉鎖性を批判することが出来たのである。またこの作品で示された加害者としての日本民族に対する視点は、当時の日本共産党の指導者責任観に対する批判でもあり、後に顕在化する党との不和を暗示するものでもあった。

第四章「安部公房と「一九五六年・東欧」」では、旅行記「東ヨーロッパで考えたこと」・「日本共産党は世界の孤児だ―続・東ヨーロッパで考えたこと」(『知性』一九五六年九月・一〇月号)を分析する。一九五六年四月にプラハで開催されたチェコスロバキア作家大会に出席するため日本を旅立った安部は、大会終了後も現地にとどまり、約二か月間各地を見て回った。同年一月に起きたスターリン批判の余波が冷めやらぬ東欧で安部が見たのは、革命後も残る人々の民族的偏見とそこに示される排他的民族主義である。一般的には否定されるべきこの事象を、安部はむしろ肯定的に評価してみせる。というのも、社会の構成員間の対立・矛盾とは、その止揚によって社会改革を推し進める契機となる、という弁証法的発展を安部は信じたからである。こうした民族間の境界を発見しその可能性を引き出す視角を得た安部は、民族内部に存在する性別や世代といった境界をも浮かび上がらせることで、多様な小集団の混成としての社会イメージを作り上げ、それを理想化する。これは民主集中制の下、強力な指導部によるトップダウン型の権力構造を採択していたソ連や中国、そして日本共産党に対する批判でもあった。こうして安部は東欧での現実から、小集団の対立・矛盾から発展のエネルギーを取り出す「下からの」権力構造の可能性を主張するに至るのだが、一九五六年一〇月に起こったハンガリー事件とそれに対するソ連の強権的な対応は、安部の認識に政治的な限界をもたらすことになる。事件の発生直後、日本でも反共・親共の立場から非難・擁護の意見がそれぞれ生み出されていたが、そうした言説に対し、安部は軍事介入の是非にのみ拘泥してばかりいる、と批判する。代わりに安部が重視したのは、事件の背景にあるハンガリー民衆の不満を引き起こした強権的権力構造の検討であり、この悲劇をいかにして権力構造の転換へとつなげるか、という視点であった。しかしソ連の姿勢を批判する自身の主張が、反共的な言説に利用される可能性を感じてか、翌年になると、安部の議論の重点はむしろ積極的なソ連擁護へと移ることになり、当初のような批判性を失ってしまう。安部は東欧での体験から、同質性に依拠するのでは

なく、多様性の擁護に立脚する共同体のイメージを獲得したのであるが、その認識の本格的な発展は、政治状況から距離を置くことになる六〇年代の到来を待たなければならなかった。

第五章「血にまみれた民族」としてのナショナリズム—『けものたちは故郷をめざす』論—では、引揚者の少年を主人公とする『けものたちは故郷をめざす』（『群像』一九五七年一月 - 四月）を取り上げている。まず、『けものたちは故郷をめざす』以前に引揚者を描いた作品である「鴉沼」（『思潮』一九四八年八月）、「〈歴史の頁が〉」（一九五一年ごろ、生前未発表）を分析し、引揚体験に対する安部の意味づけが時代ごとに変容している様を確認した上で、『けものたちは故郷をめざす』ではどのような引揚イメージが語られているかを問う。従来の研究では、主人公の久三少年が日本という国家への帰属を求めながらも拒絶され続けている点を重視し、彼を国家から切り捨てられた棄民として捉え、そこに国民国家への批判意識を読み取るものが殆どであった。しかしそうした先行研究では、久三の夢に出てくる「彼を追いかけるものとしての日本」というイメージの持つ意味が取り逃がされている。久三は確かに日本人たちからは異質なものとして排除されているが、同時に、他民族からはあくまで「日本人」として扱われ、その植民者としての過去を突きつけられている。このことは、作中には二通りのナショナリズムが描かれていることを意味している。一つは、均質な共同体内部で流通する同質圧力としてのナショナリズム、もう一つが、異質な他者との出会いにより意識されるナショナリズムである。そして安部は、後者のナショナリズム、つまり支配民族の記憶を引き受けるために背負わざるをえないナショナリズムを決して否定していない。つまりこの作品で試みられているのはナショナリズム全般の否定ではなく、その質的転換である。そしてこの新たな形でのナショナリズム、共同体原理を追求することが、六〇年代以降の安部の仕事となっていくたのである。